



# 営農NEWS



## 促成キュウリの菌核病、灰色かび病の発生に 十分注意しましょう

促成キュウリ栽培では、施設の密閉による湿度の上昇に伴って、べと病、うどんこ病、褐斑病などの病害が発生しやすくなりますので、定期的な薬剤防除を欠かすことができません（営農NEWS 第 2593 号：平成 30 年 2 月 5 日発行を参照）。さらに、これからは、果実に被害を与える菌核病や灰色かび病が発生しやすくなるため、特に注意が必要となります。

一般的に県内のキュウリ産地では、2 月前後から、菌核病や灰色かび病の発生が多くなります。なお、キュウリ栽培の連作圃場では、年々、伝染源の密度が高まっていると考えられ、特に菌核病は土中に残った菌核が唯一の伝染源ですので、前年に発病の多かった圃場では十分な注意が必要となります。

これらの病害は、発生を助長する多湿な条件が続くと急速に多発生して、薬剤散布の防除効果が十分にあがらなくなる恐れがあります。このため、晴れた日における予防散布に努め、病害の早期発見、早期防除を徹底することが特に重要となります。

果実の病害が発生しますと商品価値が無くなり、大きな減収を招いてしまいますので、適正な圃場環境の管理と的確な防除対策を徹底してください。

### 【防除対策のポイント】

- 1) 被害果を見つけたら直ちに摘除し、施設外へ持ち出して腐熟化させるなど適切に処分してください。施設内や近くに、そのまま放置することは（伝染源となって、孢子が飛散する恐れがありますので）厳禁です。
- 2) 施設内の多湿条件が続くと、急速に多発生します。昼近くになっても作物に水滴が残るような場合には、暖房や送風、換気等により、施設内の湿度をできるだけ低く保ってください。
- 3) 開花が終わっても花落ちが悪い場合には、出来るだけ枯花を取り除きましょう。
- 4) 薬剤散布は晴れた日の午前中に行い、夕方までには作物表面の薬液が乾くようにしましょう。
- 5) 湿度の高い施設では、防除薬剤に「くん煙剤」などを活用します。
- 6) 薬剤耐性菌の発生を抑制するため、同一分類（コード）の連続散布は避けてローテーション散布してください。

表 1 キュウリ菌核病、灰色かび病の主な防除薬剤（平成 30 年 2 月 19 日現在）

薬 剤 名	対 象 病 害		希釈倍率	使用時期 / 使用回数	分類
	菌核病	灰色かび病			
スミレックス水和剤	○	○	1,000~2,000 倍	収穫前日まで / 6 回以内	2
ゲッター水和剤	○	○	1,500 倍	収穫前日まで / 5 回以内	10 と 1
フルピカフロアブル		○	2,000~3,000 倍	収穫前日まで / 4 回以内	9
ファンタジスタ顆粒水和剤	○	○	2,000~3,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	11
アフェットフロアブル	○	○	2,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	7
セイビアーフロアブル 20	○	○	1,000~1,500 倍	収穫前日まで / 3 回以内	12
ジャストミート顆粒水和剤	○		2,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	17 と 12
		○	2,000~3,000 倍		
ダコニール 1000		○	1,000 倍	収穫前日まで / 8 回以内	M5
ベルコートフロアブル	○	○	2,000 倍	収穫前日まで / 7 回以内	M7
エコショット※		○	1,000~2,000 倍	収穫前日まで / -	44

注 1) エコショットは生物農薬です。灰色かび病の発病前から散布することにより、防除効果が発揮されます。

注 2) 分類欄には、FRAC コードを記載しました（コードが 2 つは混合剤）。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

上記の希釈散布剤以外に、灰色かび病を対象として、製剤を暖房機などのダクト取り付け口付近からダクト内に直接投入し、暖房機などを数時間以上稼働させることにより散布する生物農薬（ボトキラー水和剤：発病前～発病初期）がありますので、設備があれば利用できます。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040